

文化・芸術

「ピクチャー」

1935、45年ごろ、紙本彩色
27・2センチ×24・2センチ

小林古径 (1883～1957年)

小林古径は新潟県生まれ。安田靉彦とは23歳の時に出会い、ともに紅児会で研さんを積み、再興後の日本美術院で代表的な作家として活躍しました。渡欧して西洋画に触れるとともに、中国画をはじめとする東洋美術の美にも目覚めます。簡潔な描線、洗練された色彩で古典のもつ端正、清澄な美しさを繊細に描き出し、新古典主義と称される画風を確立し、優麗な歴史風俗画を多く描きました。

小品ながらも豊かに実ったブドウを画面に大きく描いた本作。軸や実が淡く澄んだ色彩を用いて描かれ、濃淡が絶妙に配されて画面を引き締めています。房は、転がらんばかりの実の一粒一粒の動きが捉えられ、果実のはじけるような張りと重さ、みずみずしさが見事に表現されており、古径の丹念な写生がうかがえます。

本作は「秋の彩り―日本画コレクション」で10月8日から展示いたします。
(大谷)

《名画の扉》 大川美術館日本画コレクションから

